



2、地名の由来

(1) 陶 (すえ)

明治 30 年 猿爪村と水上村と大川村の三つの村が合併し陶村となりました。旧村名は字名として残りました。

陶の意味は、当時既にこの地の基幹産業になりつつあった陶磁器産業の発展を願い、陶磁器の頭の陶をとり、読みは「すえ」としました。

① 陶 (すえ) に関して

- ・なかなか「すえ」とは読めないが、平安時代「陶器」と書いて「すえもの」「すえうつわもの」と呼んだ。
- ・戦国時代、周防の国の守護 大内氏の重臣に陶 (すえ) 氏がいる。
一族の中で有名なのは、陶 晴賢 (すえ はるかた) で、毛利元就と巖島で戦って敗れ滅亡した。
- ・インターネットで「陶小学校」を検索すると 4 校が検索されました。
 - * 香川県綾川町立陶小学校 (H26 全校生徒数 324 人)
 - * 愛知県小牧市立陶小学校 (H26 全校生徒数 206 人)
 - * 岐阜県瑞浪市立陶小学校 (H26 全校生徒数 145 人)
 - * 山口県山口市立陶小学校 (H26 全校生徒数 106 人)この山口市の陶が前記陶晴賢の出身地のようである。
いずれの地も、陶器に関連して地名が付けられたようです。
- ・考古学的には平安以前のものを須恵器 (すえき) という。
(還元焼成の硬質の焼き物を須恵器という)

私たちの町「陶の地名」は新しく 1897 年 (明治 30 年) に、後に「陶町史」を書いた永井圓次郎により名付けられた。永井圓次郎は猿爪村長、陶村長、恵那郡議会議員、岐阜県議会議員を歴任した名士でもあります。

ただ、猿爪、水上、大川となるといつからそう呼んだのかも定かでなく諸説あります。その諸説を勝手な想像を混じえて考えてみます。

(2) 猿爪 (ましづめ)

猿と爪、なんとも奇妙な地名で諸説がある。

また、面白おかしく、さまざまな想像ができる。

<本命>

- ① 猿爪 関屋の庚申堂にある三猿が爪の字に見える。

古くから言われている説で一応本命にしときます。

<対抗>

- ② 三河の猿投山の神様と東濃の恵那山の神様が領地を決める時、互いの山から手を伸ばし、爪がたったところ。

猿のつく地名は、瑞浪市土岐町にも猿子の地名があり、近くに三河街道（大湫～桜堂～益見～駄知～挙母）があることから、猿が猿投山に結びつくのは案外いけるかもしれません。

猿投山は古くから山嶽信仰・巨石信仰の場として崇められてきた山でもあり、「この山で毒蛇にかまれ亡くなった」とされる大碓皇子（おおうすのみこ・大碓命）の陵墓がある。山麓には、大碓命が祭られている猿投神社がある。

恵那から猿投山への道のりをつめる（近道）だから猿つめとか。この地の人が猿投神社への信仰が深く、猿投山の神様の爪の垢を煎じて飲んだとか。

<単純>

- ③ 猿が詰めているところ、猿が住んでいる所、猿を捕まえる所の「さるつめ」「さるすめ」「さるつかまえ」が「猿爪（ましづめ）」になった。
④ 爪の字は山、川が変化したもの（なんか似てる）で猿の山、猿の川の意。

上記の③④は、要するに山の中を表す地名。

<大穴>

- ⑤ 文字のない時代、野原のことを「さる」と言っていたといえます。この「さる」に猿の字を充てた。そう言えば、陶で縄文遺物（石鏃）が発見されたのは、丁奈平という野原。ここには四つの川が集まっています。猿爪川、中の草川、下山川、クラウンCCから丁奈平への川です。この川が爪の字になっているので野原（猿）に爪で猿爪になった。下記にさると爪を示します。



【総括】

私は猿爪の猿は動物の猿ではないように思う。なぜならば、①猿に関する民話、逸話、昔話を聞いたことがない。②猿の地名には猿が出没する崖地、崩壊地を意味することが多いようだが、この地はなだらかな山が多い。

また、太閤検地（1590年頃）に猿爪村 240石の記述があるが、240石は滅茶苦茶小さいわけではないので、それより相当以前からこの地に田畑はあり、猿爪の地名はあったと考えられる。関屋の庚申さんはそれより古いとは思えないが…。(関屋の庚申さんは1679年永井家祖先、祖太郎没より以前にあったのは間違いないようだが…。庚申講の普及は江戸時代)

<対抗>の②も話に少々無理があり、個人的には<大穴>の⑤を推したい。

(3) 水上（みずかみ）

<本命>

① 小里川（水）の上流域。普通に考えられるから本命。

（補完）

小里川に流れ込む猿爪川が急流となって落ち込むから、水の上の村。

確かに、今は小里川ダムに沈んでしまったが、水上樋の下からへの猿爪川沿いの道は急で（ダムの高さから推察すると、1kmの間に100m下る）小里川から見ると水の上の村に見えたかもしれない。

水上地区で最初に人が住んだのは、猿爪丁奈平（縄文遺物発見の地）近くの沢の尻と考えられるので、この説もかなり有力。

旧小里川第1発電所（川折の最下流発電所）に流れる市場平からの川もかなり急（蕨（わらび）坂）である。

小里川から見ると水の上の村に見えたであろう。

<対抗>

② 昔（鎌倉時代まで）大きな湖沼があったことから水上となった。

著書「陶の今昔」説

約900年前（鎌倉時代）は滅茶苦茶昔ではないので、現在の地形から考慮するとその頃まで大きな湖沼があったとは考えにくい。この説の根拠となっている「浜岩場、中の島といった湖にちなんだ字名が水上区に存在する。」は、いかがかなと思う。この字名の地区は現在の樋の下、その上の墓地のある一帯で、浜岩場は海岸のような崖地、中の島は洞と洞の間の島のように突き出た丘（山）と考えるのが妥当と思われる。

特に下記③に出てくる岐路の山の神様から見るとそう見えたかもしれません。

<大穴>

③ 地域の信仰を集める水の神（後の龍王さん）があった。

その後、神（かみ）の字が、上（かみ）に変わってしまった。

龍王さんは民話にも登場する雨を降らせる神様です。龍王さんが祀られたのはもっと後のことです。あの洞は高い山（岐路山）からの清い水の出る聖地だったと考えると、「水の神様のいる所」が「水の神」「水神（みずかみ）」「水上」となったのではないのでしょうか。

岐路山の水の神様の位置から見ると、前記②の辺りは浜岩場、中の島に見えたかもしれません。



<総括>

本命の①で間違いはないと思われるが、私は③も捨てたもんじゃない気はするが…。

(4) 大川（おおかわ）

<本命>

① 山の中ではあるが、比較的大きな川が中央を流れているところから。

大川盆地の周りには比較的高い山が連なっており（小原側、曾木側）、山間部の割には流量も豊かであったので大川と名付けられた。

大川盆地の中央を流れる大川川は、今のように河川工事がされていない状態の時には幅広い沼地の様な川で、川幅も相当あったのでは。

<対抗>

② 小里川の支流の中では比較的大きな川を大川川と名付け、その支流の地域を大川と呼んだ。

<大穴>

へそ曲がりの私は大川に流れる大川川が大の名がつくほど大きい川とは思えないので、もう少しひねって考えてみました。

③ 川とは三つのことで、大きなものが三つあるという意味ではないでしょうか。

たぶん山のことで、山の名はわかりませんが、浅間さんのある山、上の洞奥の山、うさぎ岩のある山、の三つのことではないだろうか？この三つの山は、かなり急傾斜の相当高い山ですから、盆地の中心部からみると大きな山が三つあるということで、大きい三つ、大きい川になったのではと思います。

あるいは、大きなものとは洞で、釜ノ洞・入ケ洞・上ノ洞の三つの洞



があるという意味かもしれません。

そして、大川の人には大きいものが好きと見えます。

現在なら確かに大きなものが三つあります。こま犬と茶壺と登り窯です。

こま犬と茶壺は世界一の大きさです。

<総括>

本命・対抗の①②はほとんど同じ意味で、地区名が早いか、川名が早いかなので、普通に考えたら地区名の方が早いで（例：土岐地区を流れる土岐川）本命の①でほぼ異論はないと思われます。

しかし、「大きいものが三つ」も、その対象が具体的に説得力あるものがみつければいいのでは？

(5) 水上・大川の地名について

それぞれの地名の由来について考えてきましたが、両方には「水」という共通項があります。地名はその地域の地形、成り立ち、風土を表すといいますが、昭和47年にこの地を襲った集中豪雨被害が猿爪に比し、水上・大川がひどかったのを思い出しました。

先祖のみなさまからの「水には気を付けろよ。」とのメッセージかもしれません。



《 陶を襲った47豪雨（左：大川、右：水上） 》